回顧と展望

あの頃の思い出

木　田　　宏
（日本学術振興会理事長）

今から考えれば，第二次オイル・ショックの後とは言いながら，岡崎の地に研究所を設置しようと論議を重ねて居た頃は，まだまだ，財源にゆとりのある良い時代であった。大学学術局を担当するようになった昭和４６年には，高エネルギー物理学研究所が，翌年には，溶接工学研究所（阪大），国文学研究資料館が，更に，その翌年には，難治疾患研究所（東京医科歯科），水圏科学研究所（名大），国立極地研究所の三研究所が設置された。

文部省の機構が改まり，新設の学術国際局を担当するようになった昭和49年には，国立民族学博物館とともに和漢薬研究所（富山医科薬科）が，そして，翌年の50年には，分子科学研究所が発足をした。この基礎生物学研究所が，生理学研究所とともに設置されたのは，それから二年後の昭和52年であった。

研究所だけを採っても，このように大変な盛況であったが，昭和48年には，筑波大学の創設とともに，無医大県解消の大事業が始まり，国立だけを採っても，15医大，６歯学部が続いている。そのほか，本命としての新構想大学が，人間科学部（阪大），総合科学部（広大），長岡，豊橋の技術科大学，兵庫，上越，鳴戸の教育大学などなど，目白押しに続いた。

それら多くの創設に担当責任者として関与し，このような積極策に参画出来たことは，悔いを残す所も少なくないが，役人冥利に尽きると言わなければなるまい。その間に，何が新しい方向であり，なにが採るべき道であるかを考え，それを施策として訴えていくことが出来たからである。

高等教育の大衆化は，避けることの出来ない世界的な流れであり，それを受け止める新しい大学を一方に構想しながら，研究の高度化，国際化を積極的に推進して，世界の人々に注目される学問研究の水準を築くようにしたい。そのためには，大衆化せざるをえない高等教育の教育システムと研究の最先端を切り開くべき研究システムを分離して，大学を越えた研究所や大学院を構想することがよいのではないかと考え，当時既に構想の具体化されていた共同利用研究所の制度によって，特色ある研究所の設置を図るべきであると，その推進に大きな生き甲斐を感じていた。

分子科学研究所，基礎生物学研究所，生理学研究所の設置は，つとに，関係者から強い要請のあったものであるが，たまたま，時の岡崎市長が，旧岡崎師範（愛知教育大岡崎分校）の跡地の利用は必ずしも大学にこだわらないとの意向を示されたことから，急速に実現の気運が高まった。昭和48年の頃であったであろう。

願ってもない敷地に三研究所を一緒に作ることができれば，色々な夢を考えることが出来る。図書館，コンピューター，食堂，宿泊施設，その他の研究環境を国際的な水準のものに高めて，世界の研

究者が集えるようにしたい。これは，研究支援を事とする事務方の発想であったかもしれない。

また，二百近い国立の大学，高専，百を上回る国立の研究機関を抱えて，その日常的な世話を個別に処理していくのは，止むを得ない仕儀かもしれないが，仕事が細分化され，担当者の視野や気宇も小さくなる恐れがある。なお，国立にかまけて，公私立の教育研究機関，さらには，教育研究全般にたいする配慮が弱くなるのではないかと危惧する気持ちもあった。それゆえ，この際，研究所群を育成して，成果があれば，これを押し広め，文部省の学術行政をより政策的なものとする一助にしたいとの気持ちが働いたことも否めない。

然し，学術研究の振興は，個別具体に立派な研究機関を作り，個々の研究者の成果に待たなければならないことも事実である。この側面から，分子科学研究所を守り立てようとされた赤松所長の要請は強く，三研究所全体の研究体制を効果的に整備したいとする発想との間には，なかなか折り合いの付けにくいものがあった。当時の実務担当者が纏めた「分子科学研究所・基礎生物学研究所・生理学研究所創設の経緯等に関する資料」に収録されている公式文書の行間からも，折角作るなら立派なものにしたいという関係者の熱意が，いろいろに火花を散らした様子が窺えるのである。

岡崎地区総合研究機構調査会議の岡村総吾座長始め，多くの委員各位，実務を担当した諸兄の忍耐強い努力が，生物科学総合研究機構（基礎生物学研究所及び生理学研究所）の設置（昭和52年），岡崎国立共同研究機構の創設（昭和56年）となって，今日に及んでいる。

個性の強い研究所が，共同の管理機構を持ち，研究活動の総合化に留意することは，容易ではないであろう。然し，諸科学が，共通の基盤を求めて，多角的に，研究の新しいフロンティアーを拡げている時，その一端を切り開こうとする岡崎の持つ意義は，決して，小さくはないであろう。関係者の理解とご尽力に期待する所である。

付記　たまたま，昨年九月，英国の ROYAL SOCIETY に招かれて，宇宙科学研究所の小田所長とともに出席した THE BRITISH ASSOCIATION FOR ADVANCEMENT OF SCIENCE の年次大会で，岡崎に長期滞在した英国の研究者から，岡崎の研究活動の素晴らしさが紹介されたのを聞き，当時の苦労が報われた思いであった。

（昭和62年１日）